

**平成 29 年度
自己点検・評価報告書
(各教職員・各組織)**

**平成 30 年 3 月 31 日
宮崎学園短期大学**

宮崎学園短期大学の自己点検・評価（総評）

学長 宗和 太郎

「2000年FD宣言」(1999年7月)に「私たちは、互いに厚く敬意を払うに足る努力を継続し、協力しあって宮崎女子短期大学の未来を拓いていくことを、敬虔なる思いと強い自信を持ってここに宣言する。」と認めた。

本学は教職員が熱心に努力を重ねている。

昨年度の本報告書に私は次のように書いた。

「1頁1頁に教職員1人ひとりの努力が、そして組織として各部署の努力が示されている。どれ1つとして例外なく、自らの使命を自覚し、努力したことを綴り、その結果を示している。いずれも『厚く敬意を払わずにはられない』ものだ。」

「実現できていることは『当たり前』になっており、意識されにくいのが、教職員の誠実さ、明るさ、元気、協力は本学の誇りである。それらに支えられて、退学者の減少、研究業績の向上という目に見える成果もここに誕生した。宮崎学園短期大学は幸せな努力を重ねて来られた。みなさんに感謝せずにはられない。」同感である。

「いよいよ教育の質保証、質の向上に向けてのイノベーションに取り組んでいかねばならない。」と結んだ。

しかし、結果は出せていない。

どの教員も学生に分かりやすい、学生が興味を持つ授業を心がけ、学生の積極性を引き出す工夫を重ねている。アクティブラーニングである。しかし「能動的学修」あるいは「主体的で対話的な深い学び」と言われる追究的なレベルを引き出せていない。それは授業外学習の時間の少なさに表れている。

外部の眼から見れば、「先生方が一生懸命しているのはわかる。それに対する学生の答えが返ってこないというジレンマを感じている。学生からの手応えを感じない。一人の人間として教えないといけないところが、就職後にもある。」(外部評価委員会における指摘：229頁)

社会人として責任を持てる状態まで指導仕切れていないのである。教育の結果責任、

学修成果に責任を持てる体制が作り出されていない。教育の質を保証できる体制が問われている。

教育の質保証に立ちはだかる壁

「入学した以上、満足して、卒業させたい。これは学生・教職員の願い」である（247頁）。その通りである。しかしお互いに「誇り」に思える満足でありたい。

「2年間で必要単位を修得させ、卒業させるという前提、最終的に合格させざるを得ない実情がある。高校までなんとかしてもらってきた学生に、勉強しなくてはならないという危機感を持たせるのは難しい。合否発表後の特別指導期間も短く、そこでしっかり勉強させ実力をつけさせようと努力するのは、教員にとってかなりの負担である。（249頁）」これが本学のぶつかっている壁である。

教育の質保証への示唆

- ・大きな成果を求めるなら、入学早期にこれまでとは異なる学習姿勢、自律姿勢を確立したい。
- ・できなければ通さない、できていないまま社会に送り出さない。それが本学の存在意義である。
- ・社会の中での存在意義を考えたとき、学生も本学も責任（使命）を自覚する。社会に貢献できる力を備えることが求められる。落とすのは、「厳しいから」「意地悪」だからでなく、社会で責任を果たす力が不足しているからである。
- ・実社会での貢献に不可欠である達成目標をスモールステップで明示し、学習環境を保証した上で、学習成果をフィードバックし、社会人への成長を軌道に乗せていく仕組みが必要である。学生としての取り組みが、実社会と地続きでつながっていることを明確にし、学習を教員任せでなく学生に自己管理させる躰（自己責任）が求められているのではないか。
- ・専攻科での国試導入並びにそれへの挑戦は、実社会への客観的ハードルが明示されることで、挑戦が生まれ、模試によるフィードバックにより学習への工夫が生まれると同時に切磋琢磨する集団果も生まれた。ハードルは社会と地続きで、教員の忝意でなく社会人になるために超えなければならない壁であった。結果として生ま

れた見事な成果は、我々に示唆するところ大である。

教育の質保証は、本学の「存在意義」に係わる。

一人ひとりの本気度が問われている。

目次

平成29年度 個人自己点検・評価

個人自己点検・評価票（教員）	1
個人のFD宣言	128
個人自己点検・評価票（事務職員）	161
個人のSD宣言	192

平成29年度 組織のFD宣言

208

平成29年度 自己点検・評価相互交流会

実施計画	226
発表資料	228
グループ協議要旨	245

編集後記